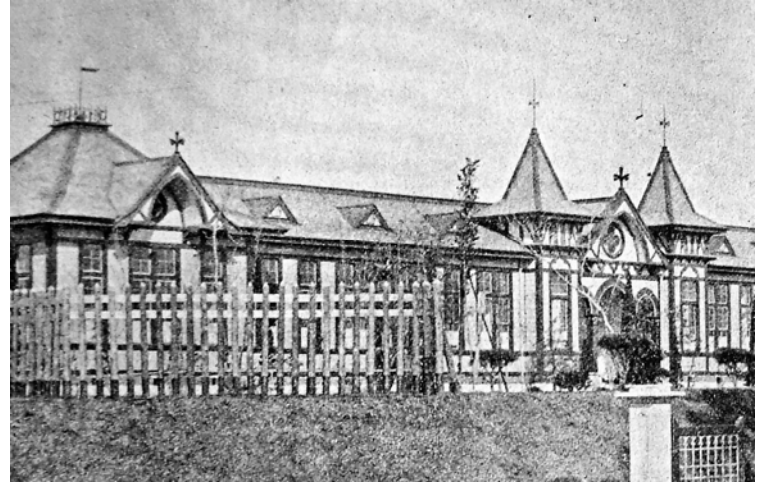


今回は、なぜ、小紙を『Acanthus』と称し、旧土浦中学校本館のパンフレットに『アカンサスの学舎』の副題を付けたのか。何故、それほど『アカンサス』にこだわるのか。その背景について述べてみたいと思います。

← 旧本館西側に、今を盛りと咲き競うアカンサス  
(平成20年7月3日 撮影)



### 『アカンサス』と『アカンサスの学舎』

旧本館には、数多くのしかも様々な装飾が施されています。その中でもこの建物のシンボリック的存在と言っても過言でない装飾があります。それが「アカンサス」という植物の花と葉をモチーフにしたデザインです。

右の竣工間もない真鍋台新校舎の写真を見て下さい。正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点に十字架の様な飾りが見えますね。これこそ、かつて、四弁の花が雄大に咲き誇っている「アカンサス」そのものなのです。残念なことに、今は三つともありません。代わりに正面玄関上には貧弱？な四角錐の飾りがあるだけで、左右の破風には面影すらありません。しかし、「アカンサス」が全く消えてしまったわけではありません。正面玄関の三連アーチの柱頭部に

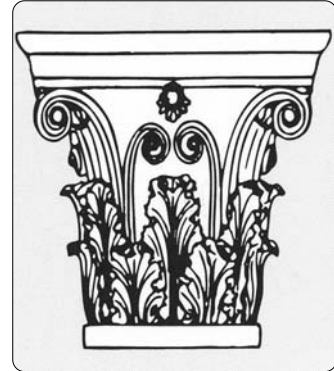
「花」を、東西の通用口の軒の屋根には「葉」を象った装飾が現存しています。この『アカンサスの学舎』も、いずれ全面的な解体修復が避けられません。そのときこそ、見事な四弁の花を再び雄大に掲げたいものです。ここに私達活用委員会が『アカンサス』にこだわる理由があるのです。

余計なことを少し書き足しましょう。うんざりしないで付き合ってください。

アカンサスはラテン語で、二つの内容をもっています。一つは植物分類上の属名であり、もう一つは古代ギリシアの神殿建築の柱頭装飾の様式を表す言葉です。植物としては、和名でキツネノマゴ科のハアザミ属。日本では、和名ハアザミよりも分類学上の属名アカンサスがよく知られています。同属は、地中海沿岸や熱帯アジアなどに約50種が分布しています。表題の『Acanthus』は地中海沿岸原産のもので、アカントゥス・スピノスス《花言葉は美術・技芸・建築》と呼ばれています。今(6〜7月)を盛り、我が旧本館西側でアザミに似た葉に包まれて咲き誇っています。上記アカントゥス・スピノススの葉は、古代建築の柱頭装飾や工芸のモチーフになったと言われています。その柱頭装飾は、紀元前5世紀末、古代ギリシアの都



アカンサスの意匠で飾られた玄関正面三連アーチの柱頭部  
(旧土浦中学校本館パンフレット)



アカンサスの葉形を圖案化した柱頭文様の一例  
(平凡社刊 大百科事典)

市国家コリントで生まれ、コリント様式と呼ばれています。世界史の教科書に必ずと言っていいほど出てくる用語です。後2世紀に建てられたアテネのゼウス・オリュンピエイオン神殿の華麗な柱頭は著名です。ローマは征服したギリシア人に文化的には征服されたと評されています。コリント様式の神殿がローマの征服地に建てられた事は、その証左です。フランスやドイツなどには、その様式の神殿遺跡が数多く現存しています。ローマ帝国後期には、その柱頭装飾は、多様な変容を重ね、発展しました。

このアカンサス・スピノススをモチーフにした柱頭装飾は、ルネサンス時代に再び日の目を見、19世紀には、更に人気を盛り返しました。日本には、明治時代以降、洋風建築と共に導入されるようになり、そして、前述したように本校旧本館の装飾のモチーフとして、設計者駒杵勤治<sup>⑧</sup>によって取り入れられました。⑧駒杵勤治氏については後日紹介します。

**お詫びとお願い** 小紙前号(第3号)で、「汚名挽回」と書いたことについて、読者からご注意をいただきました。「汚名は、挽回するものではなく、返上するものである」との適切なお指摘をいただきました。感謝し訂正致します。今後もこのようなご指摘は勿論、読後の感想や意見・要望などをどんどん寄せて下さい。投稿も期待しています。なお、旧本館西側花壇のアカンサスの花はちょうど今が見ごろです。